

林和泉掾版『釈教歌仙』について

本多潤子

はじめに

貞和三年（一三四七）に、勸修寺僧正栄海によって編纂された『釈教歌仙』は、僧侶三十六名の和歌を集めた作品で、版本としては寛文元年の刊記を持つ二種、高田弥兵衛版と林和泉掾版が存在する。このうち、林和泉掾版に関しては、現存数の多さに加えて、『釈教歌仙』の他の絵入諸本とは歌仙が一部異なり、聖徳太子を第二首に配し、第三十五首に配される貞慶上人を外している。そのため井上宗雄氏、大岡賢典氏による『新編国歌大観』『釈教三十六人歌合』諸本分類においても独立した系統として区分されている。なお、『日本歌学大系』別巻六所収「釈教三十六人歌仙」及び『国文東方仏教叢書 歌頌部』所収「釈教三十六人歌仙」の底本となった写本も林版を書写した系統の本文であり、林版と同じ聖徳太子を含む三十六人を歌仙とする近世写本も多い。

このように林版は、他の諸本にはない聖徳太子が歌仙の一人に選ばれているという特徴によって注目されてきたが、歌仙の図像にも独自の特徴を有する。『釈教歌仙』の歌仙絵としての研究は美術史の分野では、専ら東京国立博物館所蔵の南北朝期の断簡、及びその系統の模本（以下、佐佐木家旧蔵本系統と称する）を中心に研究が進められ、版本研究には注意が払われてこなかった。本稿では林和泉掾版『釈教歌仙』の書誌情報、本文、図像の特徴、出版形態などから、先行する佐佐木家旧蔵本系統との関連、そして寛文元年に刊行された意義について考えていきたい。

一 書誌情報

i 杉浦丘園旧蔵本について

まずは、林和泉掾版『釈教歌仙』の書誌と体裁を現在稿者の手元にある杉浦丘園旧蔵本によって確認する。寸法は縦二二・二二種×横十六・〇種で、表紙は破損が激しいが紺色無紋、中央に

「釋教詩仙」と刷題簽がある。内題は序文冒頭に「釈教卅六人詩仙」とあり、柱題には「釈哥仙」とする。匡郭は、縦十七・〇横十一・六種の単郭で、全一冊二十二丁。一丁から三丁までは撰者「勸修寺僧正栄海」による序文があり、四丁より二十一丁まで半丁に一歌仙（歌仙名、和歌一首、歌仙の肖像）の形式で合計三十六歌仙が描かれる。序文及び和歌本文の漢字には適宜送り仮名が付される。その三十六人は、達磨和尚、聖徳太子、僧正菩提、大僧正行基、伝教大師、弘法大師、慈覚大師、智証大師、沙弥満誓、玄賓僧都、僧正遍照、喜撰法師、僧正聖宝、素性法師、空也上人、日藏上人、蟬丸、性空上人、小僧都源信、惠慶法師、能因法師、良運法師、法師永観、登蓮法師、大僧正行尊、僧正永縁、俊恵法師、道因法師、西行法師、僧正慈円、二品法親王守覚、法橋顕照、寂蓮法師、寂然法師、僧正行意、明恵上人であり、佐佐木家旧蔵本系統や寛文元年に先に刊行された高田弥兵衛刊『釈教歌仙』と比較すると、二首目が聖徳太子で、三十五首目に貞慶上人が含まれないという点において、人選が異なっている。

最終丁の二十二丁目のオモテには、

栄海僧正

高雄神護寺別當聖濟僧正弟子無動院住

八坂新千載集二入

寛文元辛丑曆季秋 林和泉掾板行

とある。なお、杉浦丘園旧蔵本の特徴として、一丁目に「三柳居杉浦氏蔵書記」という蔵書印が押され、四丁ウラ、五丁ウラ、六丁オモテの歌仙の僧衣の一部に朱色の書入れがある。

ii 諸本

次に現存する林和泉掾版の『釈教歌仙』を確認する。林和泉掾版は国立国会図書館本、宮内庁書陵部本（『歌仙部類』のうちの第七冊）、西尾市岩瀬文庫本、神宮文庫本、天理大学附属天理図書館本、名古屋市蓬左文庫本、国文学研究資料館本、東京都立中央図書館加賀文庫本、大東急記念文庫本、岡山大学附属図書館池田家文庫本、関西大学図書館本、杉浦丘園旧蔵本などがあり、その特徴を【表一】にまとめた。

【表一】の表紙の項目をみると、版本の表紙が紺色無紋のもの、紺地に流水・あやめ、または紺地に氷水・楓、そして紺地に芝草が描かれた四種類に分けられる。これらはともに原装と思われる、林版の他の異種三十六歌仙の版本と共通する装丁である。このうち、紺地に流水・あやめ、氷水に楓の装丁は、同一の構図で植物の種類が異なるのみであり、ともに裏表紙には紺地に芝草が用いられた諸本があるため、この三種の表紙は同時期に使い分けられていた装丁のようである。また、それぞれ表紙が同じでも本紙の刷の状態は異なり、幾度も版を重ねたことが確認できる。現

存するものの多くは匡郭の欠けが多数存在するなど、状態は良いとは言い難いため、刊記の寛文元年より後代になって刷られたものと思われる。状態をみると、「表一」に示した現存諸本のなかでは都立中央図書館加賀文庫本が最も古い。

なお、寛文元年が刊行年と記されているが、近世初期の書籍目録を確認すると、寛文年間の無刊記書籍目録には『釈教歌仙』は載っていないが、寛文十年刊『書籍目録』（歌書并物語の項）、寛文十一年刊『書籍目録』（歌書并物語の項、山田市郎兵衛刊）、延宝三年刊『古今書籍題林』（歌書付狂歌の項、毛利文八刊）、延宝三年刊『新增書籍目録』（志（仮名）の項）、貞享二年板『広益書籍目録』（歌書付狂歌の項）、元禄五年刊『広益書籍目録』（歌書付狂歌の項）、元禄十二年刊『新版増補書籍目録作者付大意』（歌書付狂歌の項、永田調兵衛等刊）、天和元年刊『書籍目録大全』（志（仮名）の項、山田喜兵衛刊）、元禄九年『増益書籍目録大全』（し（かな）の項、河内屋喜兵衛刊、宝永六年増修丸屋源兵衛刊）には、「釈教歌仙（増上安海）」が載る。これらの『釈教歌仙』を記す目録のうち、元禄九年『増益書籍目録大全』には、「林いつみ」が版元の名前として記されている。以上のように書籍目録に長くその名が連ねられていることから、『釈教歌仙』は順調に版を重ねていったと考えられる。

但、現存諸本は皆「林和泉掾板行」という刊記を持つものの、その刊記の下の匡郭には入れ木の跡がみられる。さらに同じ行に記された「寛文元辛丑曆季秋」と、「林和泉掾板行」は、字体が

異なっている。（図一）そのため、版元名のみ入れ替え、それ以外は他の版元から刊行されていた版木を用いたという可能性も考えられる。「林和泉掾板行」を挿入し、奥付はそのまま流用する例は万治三年林和泉掾刊『絵入源氏物語』などにもみられる⁴。しかし、同版の『釈教歌仙』現存諸本において、林版以外の刊記が付されたものは確認できず、また前述のように元禄九年刊『増益書籍目録大全』には、「林いつみ」が版元の名前として記されていることから、十七世紀のうちに既に版木が林和泉掾のもとに移行していたことがわかる。また、林版と同じ寛文元年に書肆高田弥兵衛から異版で刊行された『釈教歌仙』と比較しても、圧倒的に林版の現存数が多く、林版の影響力の大きさがうかがえる。

【図一】架蔵本『釈教歌仙』刊記

書肆の林（出雲寺）和泉掾に関しては、宗政五十緒氏の『近世京都出版文化の研究』に「出雲寺和泉掾—禁裏・柳宮の御書物師—」として詳細な研究がある。そのうち、寛文期に活躍した林（出雲寺）和泉掾時元に関しては、林鷲峰の『国史館日録』の記事などから、

出雲寺家が公家に出入して、諸家の秘蔵する図書や日記・記録類を書写しうる便宜をもっていた

のではないかとの指摘がなされている。同版元に関しては、藤實久美子氏による研究によつて『武鑑』出版、御書物師としての幕府との関わりなど、近世前期から末期に至るまでの京・江戸における活動が明らかにされている。また、林和泉掾版の個々の出版物に関しては、『太閤記』に関して、長谷川泰志氏、柳沢昌紀氏による研究がある。

寛文年間前後の林和泉掾に関する記録は、鳳林承章『隔冥記』の寛文二年（一六六二）十月二十三日の条に、

「医者之橋悦、歌書之本屋之林和泉内々当山江可被来之由、

と、『歌書之本屋』として来訪が記され、さらに寛文七年四月四日にも「本屋之和泉入道白水来」との記録が残る。「白水」とは、林和泉掾時元を指す。また、『鶴峰林学士文集』巻第六にも、林和泉掾時元（白水）について記した「松柏堂書庫ノ記」が載り、積極的に書物の収集にあたっていたことが記される。後代となつても『京羽二重』（貞享二年（一六八五）版）には「歌書所并繪草紙」として「林和泉」が記されており、歌書を多く扱っていた。特に『新百人一首』の出版、『釈教歌仙』を含む様々な一首本三十六人歌合を集めた『歌仙』七種などの多くの名数和歌を出

版している。さらに、漢詩に關しても『詩仙石川文山』『儒仙』『武仙林道春』などの三十六人各一詩を集めた名数詩合の出版も確認できる。このような名数詩歌集の収集・出版の過程で『釈教歌仙』も出版された。なお、この林版の『釈教歌仙』の特徴としては、他の六種の三十六歌仙絵とあわせて『歌仙』七巻のうちの一巻として扱われていた時期があることも確認できるが、この点に關しては本稿第三章で改めて取り上げる。

二 特徴

i 本文、刊記

林版の『釈教歌仙』の本文の一番の特徴としては、前述のように、第二首に聖徳太子歌が入り、他系統の諸本においては第三十五首目に配される貞慶上人歌が外されていることであろう。そのため、『新編国歌大観』における井上宗雄氏の「釈教三十六人歌合」諸本分類では、聖徳太子歌のない第一系統に対して、太子歌を有する諸本を独立した第二系統として区分している。『釈教歌仙』諸本のうち、聖徳太子を三十六歌仙に含める絵入本は林版のみが確認されるが、歌仙絵を伴わず林版と同じ選歌の三十六首を有する写本としては、

・龍谷大学図書館写字台文庫『釋門三十六歌仙』（数量和歌集）
 の内）・北海学園大学北駕文庫『釋門三十六歌仙』（歌仙和歌）
 の内）

(序あり・左右あり・勅撰集名あり・二首目聖徳太子歌挿入・三十五首目貞慶上人歌なし 寛文四年の本奥書あり 『国文東方佛教叢書』歌頌部「釈教三十六人歌仙」と同系統)

・宮城県図書館伊達文庫『釋教三十六人歌合』

(序なし・二首目聖徳太子歌挿入・三十五首目貞慶上人歌なし

元禄十年書写)

・宮内庁書陵部『釈教三十六人歌』(『待需抄』の内)

(序あり・左右あり・二首目聖徳太子歌挿入・三十五首目貞慶上人歌なし、他、慈覚大師、智証大師なし 元禄十二年編纂)

・東北大学『釈教三十六人歌仙』

(二首目聖徳太子歌挿入・三十五首目貞慶上人なし「寛文元辛

丑曆季秋 林和泉掾板行」の本奥書あり、天保三年書写)

・斎藤報恩会『釋門三十六人歌仙』(『歌仙和歌集』の内)

(序なし・二首目聖徳太子歌挿入・三十五首目貞慶上人なし) などがある。これらの写本には、林版の「寛文元年」より古い書

写ものは確認できない。なお、左右・勅撰集名を付した龍谷大学図書館写字台文庫『数量和歌集』[911.205/54-W]の内の『釋門三十六人歌仙』の奥書は、

栄海僧正 高雄神護寺別當聖濟僧正弟子無動院

住八坂入新千載集

寛文第四星輯甲辰孟秋朔舒嘯

僧正栄海

敷島の道のおくなるあさか山ふかき心をいかてしらまし

とあり、続けて「一本に聖徳太子の歌なし」として貞慶歌を記している。このうち「栄海僧正 高雄神護寺別當聖濟僧正弟子無動院／住八坂入新千載集」という記述は、「入」の位置が前後するが、林版の刊記と同一である。林版が寛文元年刊行なのに対し、寛文四年と新しいことから、林版の刊記を書写したものと考えられる。

では、聖徳太子歌を挿入することにより、配列にはどのような特徴が付加されたのであろうか。架蔵の林版『釈教歌仙』冒頭四首は、

達磨和尚

いかるかや富とみの小河せがわの絶たはこそわかおほ君の御名をわすれめ

聖徳太子

しなてるやかた岡山おかのいひにうへてふせる旅人たびあはれおやな

し

僧正菩提

かひらえにともちきりしかひ有て文殊もんじゆの御かほいまみつる

かな

大僧正行基

靈山れいざんの釈迦しやくかの御前ごぜんに契ちぎてし真如しんじゆくちせずあひみつるかな

となつてゐる。挿入された聖徳太子歌は、典拠である『拾遺和歌集』巻二十哀傷【一三五〇、一三五十一¹⁰】をみると、

聖徳太子高岡山辺道人の家におはしけるに、餓ゑたる人
みちのほとりにふせり、太子ののりたまへる馬とどまり
てゆかず、ぶちをあげてうちたまへどしりへしりぞきて
とどまる、太子すなはち馬よりおりて、うゑたる人のも
とにあゆみすすみたまひて、むらさきのうへの御ぞをぬ
ぎてうゑ人のうへにおほひたまふ、うたをよみてのたま
はく

しなてるやかたをか山にいひにうゑてふせるたび人あはれお
やなし

になれなれけめやさす竹のきねはやなきいひにうゑてこ
やせるたび人あはれあはれといふうたなり
うゑ人かしらをもたげて、御返しをたてまつる
いかるがやとみのを河のたえばこそわがおほきみのみなをわ
すれめ

と、『釈教歌仙』第一首に達磨和尚歌として採られた、うゑ人の
「いかるがや」歌との贈答歌であることがわかる。この和歌を詠
んだ片岡のうゑ人は、中世以降の各種片岡山説話において『釈教
歌仙』同様達磨とされる。これらをふまえ、林版では聖徳太子の
和歌も加え一対の贈答歌として採っているのである。さらに続

く菩提・行基の和歌も、同じく『拾遺集』巻二十哀傷【一三四
八、一三四九】の、

南天竺より東大寺供養にあひに、菩提がなぎさにきつき
たりける時、よめる

靈山の釈迦のみまへにちぎりてし真如くちせずあひ見つるか
な

返し 婆羅門僧正

かびらゑにともちぎりしかひありて文殊のみかほあひ見つ
るかな

という贈答歌を典拠としている。こちらの贈答歌は、佐佐木家旧
蔵本系統も二首とも採歌している。なお、林版と同じ選歌の北海
学園大学北駕文庫にはさらに左右が付され、達磨と太子、菩提と
行基の二組の贈答歌を番とする。このように、太子歌の挿入によ
つて、『釈教歌仙』冒頭は勅撰集の贈答歌を二組並べた形となる。
さらにこの冒頭四首の後は伝教大師と弘法大師、慈覚大師と智証
大師と入唐八家のうちの四人がそれぞれ対になる。つまり、聖徳
太子歌を挿入することによって、対の意識がより強い構成となつ
ていると言えよう。特に行基までの『拾遺集』所収歌について
は、栄海の『釈教歌仙』序文（架蔵本林和泉掾版）において、

聖徳太子の片岡山のう

友人にむらさぎの衣を給し顕
性成佛のふかき心の色をしめし
婆羅門僧正梵国よりいたりし
行基菩薩とともに靈山会坐の
昔のちきりをのへ給ふ

と、和歌の詞書に相当する内容が記されている重要な箇所である。この序文該箇所の前には、「天竺一月の国」と本朝「日の本」を対にして記す記述が多い。聖徳太子歌の挿入によって、達磨と太子、菩提と行基という二対四首の和歌を三十六歌仙の冒頭に配することとなるが、このことにより冒頭四首が天竺と本朝の対になり、序文の記述との対応が明確となる。

では、この聖徳太子歌を二首目に加えるという発想は、どこから生じたのであろうか。「釈教歌仙」絵入諸本のうち、南北朝期の佐佐木家旧蔵本の達磨部分は、現在東京国立博物館に所蔵されているが、そこには、「達磨和尚」という歌仙名、達磨の肖像、そして「いかるかや」歌に続き、「聖徳太子」と名が記され、童子の姿が描かれている。和歌は伴わず、続いて第二首目の菩提僧正箇所に移る構成となっている。前述の序文においても片岡山の聖徳太子に関する記述があり、中世の絵巻作成段階において、和歌は伴わずとも太子の存在は既に意識されていたのである。南北朝の栄海の構想には聖徳太子の和歌を三十六首に盛り込む考えはなくとも、後世太子歌を挿入する系統が生じるのは自然な流れ

であつたらう。

ii 歌仙絵

歌仙の選定において独自の解釈をみせた林版であるが、その歌仙の肖像に關しても興味深い事象がみられる。現存の『釈教歌仙』絵入本は、佐佐木家旧蔵本やその系統（模本類、高田弥兵衛版本）、そして歌意絵の付された東京国立博物館所蔵『釈教歌仙』模本がある。なお、歌意絵入り模本の歌仙の肖像は、背景に描かれた歌意絵を除けば東博本『釈教三十六歌仙絵』系統と概ね同じ傾向を示している。この佐佐木家旧蔵本系統に比べて、林版の歌仙絵はどのような特徴を有するのであろうか。

【表二】は、近世末期の模本ではあるものの、佐佐木家旧蔵本系統の完本である早稲田大学附属図書館所蔵『釈教三十六人歌仙』（以下早大本と称す）と林版『釈教歌仙』の歌仙絵を比較したもので、林版の欄には早大本との相違点のみを記している。この表から、林版は早大本に比べ、様々な持物が加わり、偶数番にあたる歌仙の体の向きが反転し、向かって右向きになっていることがわかる。

持物が加わった具体例として、冒頭の達磨・聖徳太子部分で【図二】早大本、【図三】林版で示した。林版では、達磨については座る動物が描き加えられている。また、聖徳太子については衣服に紋様が加えられ、左肩には袈裟の紐が描かれ袈裟をまとう姿で描かれている。袈裟は聖徳太子童形像の一種である孝養像に多

く付されている。よつて、林和泉掾版では一般的な祖師像も参考にして歌仙像を描いたと考えられる。但、孝養像では柄香炉を両手で捧げ持つ姿で描かれるのが一般的であり、林版の太子像がそれを持たない姿であることは注目に値する。林版の童形の立像で袖手という特徴は【図二】の早大本にみられる特徴と一致する。さらに、早大本、林版の三十六人の歌仙の肖像のなかで立像は聖徳太子のみであるという点も一致する。また、達磨と聖徳太子の贈答歌の元となった片岡山説話は、各種『聖徳太子絵伝』等に描かれているが、太子四十歳の行跡のため、絵伝において太子が童形に描かれることはない。そのため、林版の図像は佐々木家旧蔵本系統の図像を踏襲したものであると考えられる。

なお、佐々木家旧蔵本系統の絵入諸本のなかで、寛文元年秋の林版出版以前に最も流布していたものは、同年の五月に同じ京都の版元、高田弥兵衛により刊行された『釈教歌仙』であろう。高田版は、林版とは異版で、佐佐木家旧蔵本系統の図像を有する。但、【図二】の聖徳太子像を取り入れず、三十五首目の貞慶上人をそのまま歌仙に採るといふ点で、林版と大きく異なる。そのため、先行する高田版のみを元にして版下絵が作成されたとは考え難く、佐佐木家旧蔵本もしくはその模本などの絵入諸本を直接参照していた可能性がある。林版は佐佐木家旧蔵本系統に比べ、持物が多いなどの相違点があるものの、佐佐木家旧蔵本系統の特徴もまた有していることが確認できる。

林版が有する特徴のなかで、佐佐木家旧蔵本系統の特徴と一致

する最も明確な箇所は、弘法大師の肖像であろう。佐佐木家旧蔵本系統では弘法大師部分のみ歌仙の肖像の背後に風景が描きこまれているが、林版も同様に弘法大師部分のみ肖像の背景に風景が描かれているのである。【図四】早大本では、祠が描かれ、その脇の洞の中に座す弘法大師と松、波が描かれている。そして【図五】林版でも、祠はないものの、早大本と同様に洞の中に座す弘法大師と松、波が描かれている。祠の有無に関しては、林版が半丁一歌仙という縛りがあり、早大本のように横に広がることのできないため、省かれたのだと考えられよう。なお、早大本と同様に佐佐木家旧蔵本系統に属する高田版においても洞の中に座す弘法大師と松、波が描かれ、祠は省略されている。

一方、背景の描写ではなく、弘法大師の肖像部分に関しては、右手に五鈷杵を持ち胸の前に示し、左手には数珠を持つという共通点がある。但、持物を持つ腕は変わらぬものの、林版では顔と体を右に向けている点、袈裟が通肩である点が早大本と大きく異なる。また、早大本では洞に沿って右側から松が二枝の枝を伸ばしているが、林版では左側に松が描かれる。よつて、持ち手が規定されている持物以外の要素が林版では左右反転して描かれていることがわかる。

元来、南北朝期に成立した『釈教歌仙』の佐佐木家旧蔵本系統の歌仙絵では、一首目に付随する聖徳太子像と、三首目の行基像以外の像が、向かって左方に体を向けて描かれていることが、梅津次郎・森暢・土屋貴裕氏らによつて指摘されている¹⁶⁾。しかし、

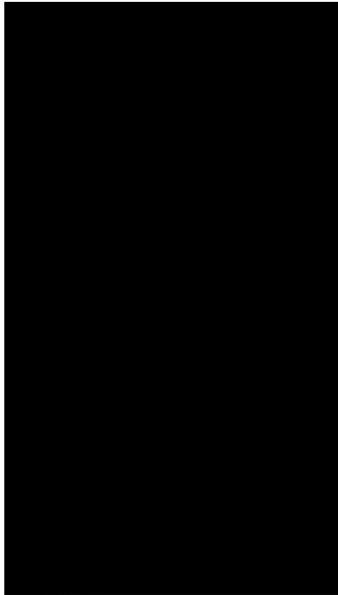
【図二】 早稲田大学所蔵『釈教三十六人歌仙』第一首
達磨和尚（聖徳太子：和歌なし）



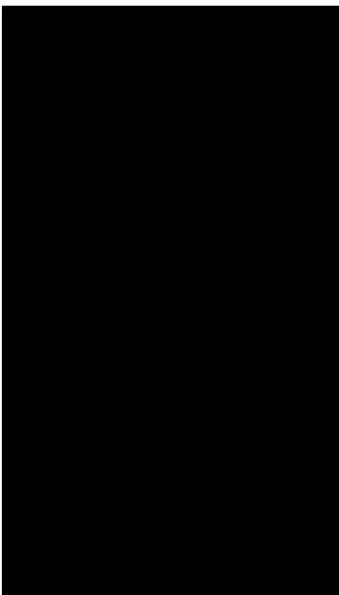
（早稲田大学図書館古典籍総合データベースより）

林和泉掾版『釈教歌仙』について

【図三】 林和泉掾版『釈教歌仙』第一首
達磨和尚（架蔵）

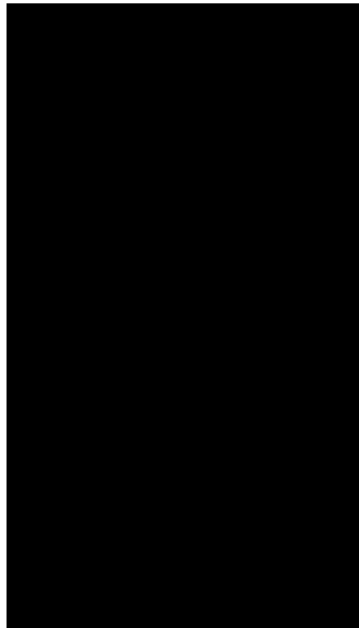


同 第二首 聖徳太子（架蔵）





(早稲田大学図書館古典籍総合データベースより)



【表二】に示されるように林版にはその左向性はみられない。今回取り上げた弘法大師箇所以外にも、多くの歌仙像が左右反転して描かれ、向かって右方を向く姿となっている。そして、その右を向く歌仙達は皆、偶数首に該当する歌仙であり、奇数首の左に向く歌仙、偶数首の右に向く歌仙が交互に登場する構成となっている。つまりそれぞれの丁のオモテに描かれた奇数首の歌仙は左を、ウラに描かれた偶数首の歌仙が右を向き、奇数首と偶数首の歌仙が向き合った状態に改変されているのである。このような対の意識も、林版の歌仙絵の独自性を生み出した大きな要因の一つであったと考えられよう。

この対の意識は、林版『釈教歌仙』が近世後期に、異種三十六

歌仙を集めた『歌仙』七種の一種としてみなされる際に他の歌仙と共通する形式として機能する。この七種のうち『釈教歌仙』を除く六種は皆、左右が付されて奇数首と偶数首が対になっている。一首半丁で、その一對ごとに一丁のウラオモテに配され、お互いに体に向けて対面する形式となつていのである。このような、他の三十六歌仙の形式をふまえた改変であるならば、林版『釈教歌仙』の図像の左向性の欠如は対を意識した意図的なものと考えられよう。

三 『歌仙』七種

林版『釈教歌仙』は、単体で扱われるだけではなく、他の異種三十六歌仙と同じ装丁を施し、『歌仙』七種のうちの一種としても取り扱われていた。その七種とは、『歌仙』『中古歌仙』『新歌仙』『新女歌仙』『続女歌仙』『職人歌仙』そして『釈教歌仙』であり、半丁に一歌仙の和歌一首と肖像が刷られている。『歌仙』七種の個々の書名は、前述の各種近世初期書籍目録にみえ、元禄九年の『増益書籍目録大全』には、「林いつみ」が『職人歌仙』『釈教歌仙』の版元名として、「いづみ」が『新歌仙』『新女歌仙』『続女歌仙』の版元名として記されている。この七種を一つの叢書として扱う記事としては、次の『群書一覽』がある。享和二年（一八〇二）五月刊行の尾崎雅嘉著『群書一覽』の卷之五「撰歌類」の項には、

歌仙 七卷

此書古今の歌仙をあつめたり坊間に歌仙揃と称す

- 第一卷 古歌仙 第二卷 中古歌仙 第三卷 新歌仙 第四卷 新女歌仙 第五卷 続女歌仙 第六卷 職人歌仙 第七卷 釋教歌仙

との記載があり、十九世紀には「歌仙揃」とも称され、七巻が流通していたことがわかる。【表一】においても、この七種でまとまりとなり、伝存する諸本が複数存在する。一例として、神宮文庫所蔵の『歌仙』を確認すると、神宮文庫本は六冊が現存し、各最終丁には、

天明四年甲辰八月吉旦奉納
皇太神宮林崎文庫以期不朽
京都勤思堂村井古巖敬義拜

と天明四年（一七八四）八月に奉納した旨を示した印が押されている。この六冊の表紙に付された刷題箋には、漢数字の書き込みがあり、『歌仙』に「老」、『新歌仙』に「三」、『新女歌仙』に「四」、『続女歌仙』に「五」、『職人歌仙』に「六」、『釈教歌仙』に「七」とあるため、元は「二」として『中古歌仙』があったと考えられる。よって『群書一覽』に『歌仙』あるいは「歌仙揃」として記されたものと同一の形式で天明四年に奉納されたことが

確認できる。他の諸本においても、何冊目がどの歌仙に相当するのかが異なる場合があるものの、この七種に「武家歌仙」などの他の歌仙が加わった形式のものには確認されていない。

この『歌仙』七種に関しては、森嶋氏が『歌合絵の研究』序において、

江戸時代に板行された歌仙絵叢書一種に、釈教歌仙、古歌仙、新歌仙、女歌仙、続女歌仙などと共に、職人歌仙を加えたものがある（寛文元年林和泉掾版）。近世における歌仙絵好尚の動向を示すものとして興味深い叢書であるが、しかし職人尽歌合絵は見るところ、絵としては風俗画的傾向を示すものであり、また歌合としては多分に物合的な性格を示すものであって、本書に取扱う歌仙絵としてはやや異質のものとも考えられる（略）

とし、さらに国文学研究資料館『江戸の歌仙絵』展図録において以下の解説が付されている。

『歌仙七種』は、室町時代以前に成立した異種三十六歌仙七種を集成、出版したものであり、江戸時代に種々変容を遂げる前の『三十六歌仙』の概要を知ることができ、貴重である。

また、『補訂版国書総目録』にも七冊をまとめた書名が載り、

○歌仙 七冊 [別] 歌仙揃 [類] 和歌 [著] 北村季吟・西山宗因・松江維舟等編

〔成〕寛文元刊 [版] 国会・岡山大池田・彰考(六冊)・神宮(巻一欠、六冊)

*古歌仙・中古歌仙・新歌仙・新女歌仙・続女歌仙・職人歌仙・釈教歌仙を収む

とある。この他、七冊揃としては、前述〔表一〕に示したように国文学研究資料館、西尾市岩瀬文庫などに所在が確認でき、書陵部所収の『歌仙部類』七冊(二二—三—三五)も同一のものである。なお、『釈教歌仙』がないため、〔表一〕には提示していないものの、有吉保氏によって勉誠社より出版された『歌仙 三十六歌仙五種類』(一九九六年)に載る影印もまた、この歌仙揃七種のうち『歌仙』『中古歌仙』『新歌仙』『続女歌仙』『新女歌仙』と思われる。

但、この『補訂版国書総目録』の分類に関して、著者の項目に、「北村季吟・西山宗因・松江維舟等編」とある点に関しては未だ確認が取れていない。林版の版本に撰者が明記されているものは、『職人歌仙』の烏丸光広(副題簽に「職人歌仙 光広脚選」と刷られている諸本がある)、『釈教歌仙』の勤修寺僧正栄海(「一丁オモテ一行目に「勤修寺僧正栄海撰」とある)である。他の五

種に關しては、室町以前の成立であるため、季吟や宗因らの撰とは考えがたい。なお、七種のうちの第一冊目にあたる『歌仙』と同じ和歌を有する系統は、新藤協三氏の「一首歌仙本」三十六人歌合の諸形態²³の六つの分類に照らし合わせると、「拾穂抄型

北村季吟著『歌仙拾穂抄』に採択された三六首」となるが、この系統は「中、近世を通じて最も広く流布した、典型的な一首歌仙本の本文なのである」とされ、最古の写本としては陽明文庫所蔵の後法興院近衛政家（一四四四～一五〇五）真筆本があると指摘されている。この系統の本文は、『歌仙』七種の『釈教歌仙』の刊記に記された「寛文元年」前後においては、加藤警斎が『三十六歌仙和歌抄』（万治三年（一六六〇）跋文執筆）に用いている。また、『歌仙』以外を確認すると、一首本ではないものの、『新歌仙』と同じ歌仙・和歌を有する三首本『新撰歌仙』は、飛鳥井雅章編『数量和歌集』（承応二年（一六五三））において、『後鳥羽院御撰』として収録される。さらに、享保二年に刊行された『群書一覽』には、『新三十六人歌仙』『中古歌仙』『女歌仙』は「撰者つまびらかならず」とある。このように、それぞれの撰者に關しては明確にはなっていない面が多い。

では、この七種を叢書としてまとめて扱うという編纂が季吟らによってなされたのか。この点に關しても疑問が残る。本稿では既に、『釈教歌仙』の刊記の問題を取り上げたが、この七種は寛文から宝永にかけての書籍目録では、七種まとめた扱いはされておらず、寛文年間当初から明確な意図のもと、この七種が一連の

叢書として編纂されたのかは疑問が残る。特に、『書籍目録』に名前が記され始める時期のずれからも、この問題は明らかである。寛文十年刊『書籍目録』『歌書并物語』の項には、

- 一冊 哥仙 魯内式部卿 光茂
- 一冊 新哥仙
- 一冊 同中古
- 一冊 女哥仙
- 一冊 同中古
- 一冊 釈教哥仙 僧正家海
- 一冊 同武家
- 一冊 同職人 光康卿

と、『新歌仙』『中古歌仙』『釈教歌仙』『職人歌仙』の名前が記される。²⁴一方『新女歌仙』『続女歌仙』は延宝三年刊『新增書籍目録』「か 仮名」から記される。

- 一 哥仙
- 一 同新歌仙
- 一 同続
- 一 同新女哥仙
- 一 同続

なお、延宝三年刊『新增書籍目録』においては「し 仮名」の項目に「職人歌仙」「釈教歌仙」が記されている。『歌仙』に関しては、寛文十年刊、延宝三年刊のいずれにも含まれているが、寛文十年刊『書籍目録』の「歌仙」の項目に記された「尊円 式部卿 光悦」の三種の歌仙と林版は異なる採歌であり、版元名の記された元禄九年、宝永六年、正徳五年の各種書籍目録では、異なる版元名が「歌仙」の項に記されているため、林版の『歌仙』の存在は確認できない。『歌仙』という名の七冊本の記載もなく、『補訂版国書総目録』に別書名として挙げられる『歌仙揃』という名の七冊本もまた同様に確認できない。このように、書籍目録からは個々の異なる出版事情がうかがえ、現時点で叢書として確認できる時期としては、先に挙げた神宮文庫の六冊本の「天明四年（二七八四）八月」まで待たなくてはならない。以上から、七種をまとめて扱うという編纂作業に季吟らが介在していたとも考え難い。

おそらく、『補訂版国書総目録』の『歌仙』（七種）著者項目の記載に関しては、『歌仙』の「別書名」として記されている「歌仙揃」と同じ書名を持つ、『歌仙そろへ』との混同があったのではないだろうか。

歌仙そろへ 一冊 「別」歌仙俳諧揃 「類」俳諧 「著」山岡元隣編 「成」寛文六成？、延宝四刊 「版」東大付録
 「活」日本俳書大系俳諧部・俳書集覽

この『歌仙そろへ』は、第一巻を北村季吟、第二巻を西山宗因、第三巻を松江維舟が詠んだ歌仙俳諧であり、この三人の名前が林版『歌仙』の著者の項目に記されているのである。同一書名でも寛文年間の刊行であるため、混乱があったとも推測できよう。なお、『釈教歌仙』刊記に記される「寛文元年秋」の記録が現存する『北村季吟日記』およびその紙背においても、林和泉掾との交流はうかがえるものの、『歌仙』七種の出版に関わる記事はない。

複数の異種三十六歌仙を類聚するという営為は、寛文年間以前からみられる。林版の『歌仙』七種は『職人歌仙』を除き、先行する承応二年の本奥書を持つ飛鳥井雅章編『数量和歌集』（書陵部）にその和歌が採られている。林版『歌仙』『中古歌仙』『新歌仙』『新女歌仙』『続女歌仙』『釈教歌仙』の三十六人の配列、撰歌をみると、『数量和歌集』所収の『古歌仙』（一歌仙複数首の広本系）、『中古歌仙』（一首本）、『新撰歌仙』（三首本）、『女房歌仙』（三首本のうちの第二首目が『新女歌仙』、三首目が『続女歌仙』）、そして『釈門歌仙』にその歌仙・和歌が見いだせるのである。但、『数量和歌集』の『釈門歌仙』には、勸修寺僧正栄海撰という撰者表記はなく、序文もない。また、『古歌仙』『新撰歌仙』は一首本ではない等の相違点があり、直接の典拠とは考え難い。しかし、『数量和歌集』系統の諸本のうち、国立歴史民俗博物館所蔵高松宮家旧蔵禁裏本『数量和歌』（H-600-305 ふ函56）においては、三首本であった『新撰歌仙』が一首本『新三十

六人歌合」として収録され、その選ばれた一歌仙一首計三十六首は林版『新歌仙』の撰歌と一致する。なお、高松宮家旧蔵本『数量和歌』に別項目で加えられた『釈門三十六歌仙序』は、林和泉掾版の歌仙絵への影響関係がうかがえる佐佐木家旧蔵本と、虫損箇所等の本文の欠落部が一致する。序文に関しては高松宮家旧蔵本『数量和歌』と林版『釈教歌仙』は同一系統の諸本を底本に用いていることが確認できるのである。また『職人歌仙』『釈教歌仙』を除く五種の歌仙の和歌が、寛文元年に西園寺実晴が書写した『秀歌撰集』（立命館大学西園寺文庫）に含まれる。以上から、類従編纂過程を考える際には、先行する堂上歌壇の影響を考慮する必要があろう。寛文年間の林和泉掾は鳳林承章のもとにも出入りして、書物の収集にあたっていたことが前述『隔冥記』から確認できる。当時の堂上歌壇の動きを敏感に受け取れる立場に版元自身がいたことは、この『歌仙』七種の出版を可能にした要因の一つであらう。

寛文元年に京の書肆林（出雲寺）和泉掾によって刊行された『釈教歌仙』は、現存する『釈教歌仙』のうち、佐佐木家旧蔵本系統の要素を多分に含む作品である。相違点としては、佐佐木家旧蔵本系統では一首目の達磨和尚の和歌の背景に添えられていた聖徳太子の図像に、林版は和歌を加えて独立した一歌仙とした点、そして佐佐木家旧蔵本系統にみられた歌仙の左向性を排し、偶数首の歌仙を右向きにし、奇数首と向かい合わせにしたことにより、奇数首と偶数首の番の意識を明確に示した点がある。さらに、『歌仙』七種の一種として、異種三十六歌仙の中に位置付けられたことも、『釈教歌仙』の普及に大いに貢献したと思われる。その林版の各種歌仙のうち、『歌仙』は先行して刊行されていた嵯峨本『三十六歌仙』（尊円本系統の本文）とは異なる系統の和歌を採り、『新／続女歌仙』も先行する野田版『女歌仙』とは異なる和歌を選んで²⁸いる。また、その選定が『職人歌仙』を除き、全て飛鳥井雅章の編纂した『数量和歌集』に淵源を見いだせる点は、近世における名数和歌の受容と一首本化の過程を考える上で興味深い。『釈教歌仙』刊行年の寛文元年には、西園寺実晴が、『数量和歌集』をより一首本化した名数和歌を類聚した『秀歌撰集』を書写しており、近世中期書写の高松宮家旧蔵本『数量和歌』も『秀歌撰集』同様『数量和歌集』に比べて一首本化が進ん

まとめ

である。このような堂上における名数和歌類聚の動き、そして一首本化の動きのなか、町版として林版の一首本『歌仙』七種類が出版された。寛文年間の書肆林和泉掾は林家や季吟のみならず、鳳林承章のもとにも出入りするなど、当時の地下から堂上に至る歌壇の動きを敏感に受け取れる立場にいた。

書肆林和泉掾は幕府の御書物師となり、江戸にも出店し、明治に至るまで存続した大書肆であった。そのような版元から出版された林版『釈教歌仙』は十七世紀より十九世紀に至る近世のながきにわたって、他の異種歌仙とともに『歌仙』七種として版を重ねられていったのである。

付記

貴重な歳書の閲覧をご許可くださいました各所蔵機関、また画像の掲載をご許可くださいました早稲田大学図書館に心から御礼申し上げます。

注

- (1) 久曾神昇『日本歌学大系』別巻六 風間書房 一九八四年
- 鷺尾順敬『国文東方仏教叢書 歌頌部』東方書院 一九二五年
- (2) 梅津次郎『釈教卅六人歌仙圖考』『美術研究』九二—一九三九年、森暢『歌合絵の研究』角川書店 一九七〇年

土屋貴裕「『釈教三十六歌仙絵』における仏法観と和歌観—達磨・聖徳太子をめぐる言説とイメージ」『中世仏教文化の形成と受容の諸相』二〇〇七年

土屋貴裕「『釈教三十六歌仙絵』と真言僧栄海」『東海仏教』五二—二〇〇七年

(3) 『江戸時代書林出版書籍目録集成』井上書房 一九六二—一六三年 所収

(4) 清水婦久子『源氏物語版本の研究』和泉書院 二〇〇三年

(5) 宗政五十緒『近世京都出版文化の研究』同朋舎出版 一九八二年

(6) 藤實久美子『近世書籍文化論』吉川弘文館 二〇〇六年

(7) 長谷川泰志「林和泉掾時元と『太閤記』の出版」『鯉城往來』一一—一九九八年一〇月

(8) 柳沢昌紀「軍記物語の出版と版元—近世前期を中心に—」『軍記と語り物』三九—二〇〇三年三月

(9) 『鷲峰林学士文集』近世儒家文集集成一二 ぺりかん社 一九九七年

(10) 『新編国歌大観』

(11) 片岡山説話と達磨の関わりに関しては、以下の研究がある。
 荻須純道「聖徳太子と達磨日本渡来の伝説をめぐりて」

『日本仏教会年報』二九 一九六三年

堅田修「聖徳太子片岡山飢者説話の基底」『日本の社会と宗教』同朋舎出版 一九八一年

久野昭『日本に來た達磨』南窓社 一九九八年

松本真輔「三元亨釈書」本朝仏法起源譚の位相―達磨と太子の邂逅をめぐって―『中世文学』四三 一九九八年

(12) 序文に天竺と本朝の対比がなされていることに關しては以下の研究に指摘がなされている。

佐藤愛弓「『釈門三十六人歌仙絵』の構想について」『女子大文学 國文篇』四八 一九九七年

(13) 注(2) 参照
(14) 「影印」有吉保『歌仙 三十六歌仙五種類』勉誠社 一九九六年

〔同系統の翻刻〕『日本歌学大系』別卷六「古三十六人歌合(丁)」(底本：志香須賀文庫蔵『歌僊部類』)

(15) 「影印」有吉保『歌仙 三十六歌仙五種類』勉誠社 一九九六年

〔翻刻〕『日本歌学大系』別卷六「新中古歌撰(別)」石川常彦「十三世紀中葉の歌仙秀歌撰のこと」『新古今の世界』和泉書院 一九八六年(初出『武庫川女子大学紀要』二五 一九七七年)

(16) 「影印」有吉保『歌仙 三十六歌仙五種類』勉誠社 一九九六年

〔同系統の翻刻〕『日本歌学大系』別卷六「新歌仙」(底本：内閣文庫蔵『歌仙雜集』)；林版とは収載歌が一部異なる

(17) 「影印」有吉保『歌仙 三十六歌仙五種類』勉誠社 一九九六年

〔翻刻〕『日本歌学大系』別卷六「女歌仙(丁)」〔同系統の翻刻・研究〕

森暢「類似三十六歌仙絵」『歌合絵の研究』角川書店 一九七〇年

森暢『歌仙絵・百人一首絵』角川書店 一九八一年
大伏春美『女房三十六人歌合の研究』新典社 一九九七年

(18) 「影印」有吉保『歌仙 三十六歌仙五種類』勉誠社 一九九六年

〔翻刻〕『日本歌学大系』別卷六「続女歌仙(戊)」〔同系統の翻刻・研究〕

森暢「類似三十六歌仙絵」『歌合絵の研究』角川書店 一九七〇年

森暢『歌仙絵・百人一首絵』角川書店 一九八一年
大伏春美『女房三十六人歌合の研究』新典社 一九九七年

(19) 「同系統の翻刻」『統群書類従』三三三下 雑部 一九七九年

林和泉掾版『釈教歌仙』について

↓異同(第四首・第二十四首・第三十三首)あり

「同系統の研究」荒木礼子「狂歌合『職人歌仙』について」『成蹊国文』一〇一九七七年

(20) 『群書一覽』江戸 須原屋茂兵衛 大阪 加賀屋善藏
海部屋勘兵衛 刊

(21) 森暢『歌合絵の研究』角川書店 一九七〇年

(22) 国文学研究資料館『江戸の歌仙絵』図録 二〇〇九年

(23) 新藤協三『三十六歌仙叢考』新典社 二〇〇四年

(24) 寛文十一年、延宝三年、貞享二年、元禄五年、元禄十二年
版書籍目録も同様である。

(25) 天和元年、元禄九年、宝永六年版書籍目録も同様である。

(26) 『北村季吟日記』北村季吟著作集二 一九六三年

(27) 川平ひとし、大伏春美『影印本 鳴の羽搔』「解題」新
典社 二〇〇五年

(28) なお、『新女歌仙』『続女歌仙』の歌仙図は、明暦四
(二六五八)年に野田弥兵衛尉によって出版された『女歌
仙』の図を転用している。一部の歌仙の衣の模様、畳の縁
の柄等が変えられてはいるものの、大本の野田版から半紙
本の林版に合うよう、歌仙の衣や畳の左右を削って中心部
分をそのまま用いている。林版が、『新／続女歌仙』とい
う題であることも、野田版『女歌仙』の存在を意識したも
のと推測できる。

〔表一〕 林和泉搦版『釈教歌仙』諸本一覽（大東急記念文庫本〔41-18-30-28〕は未見）

	表紙	題簽位置	外題	歌仙七種
岡山大学附属図書館池田家文庫本〔貫911-7-7〕	紺	表紙左上朱地	釋教謔仙（刷）七終（書）	七種の内の七
刈谷市中央図書館村上文庫本〔w1169〕	紺	表紙左上	釋教謔仙（刷）	
関西大学図書館本〔911.247/K977〕	紺	表紙左上	釋教謔仙（刷）	
宮内庁書陵部本（歌仙部類）〔213-35〕	紺地に水水・楓 （裏表紙紺地に芝草）	表紙左上朱地	釋教謔仙（刷）七（書）	七種の内の七
国立国会図書館本〔127-113〕	紺	表紙中央	釋教謔仙（刷）七 大尾（書）	七種の内の七
国立国会図書館本〔834-204〕	紺地に芝草	剥落	釋教三十六謔仙 六（朱書）	七種の内の六
国立国会図書館本〔188-478〕	改装（国会図書館）	表紙左上	釈教三十六人歌仙 全	
国文学研究資料館本〔99-144-7〕	紺地に流水・あやめ （裏表紙紺地に芝草）	表紙左上	釋教謔仙（刷）	七種の内の七
神宮文庫本（マイクロのみ確認）		表紙左上	釋教謔仙（刷）	六種の内の七（一冊欠）
天理大学附属天理図書館〔910.2-1439-89〕	紺	表紙左上	釋教謔仙（刷）	
天理大学附属天理図書館〔911.24-441〕	紺	表紙左上	釋教謔仙（刷）	
東京都中央図書館加賀文庫本〔加7038〕	改装	表紙左上	釈子三十六歌仙 全（書）	
名古屋市蓬左文庫本〔蟹一七三〕	紺地に流水・あやめ	表紙左上	統謔仙（朱書 題簽剥落）	四種の内か
架蔵本	紺	表紙中央	釋教謔仙（刷）	

【表二】『釈教歌仙』早大本・架蔵林和泉掾版歌仙画像比較

達磨和尚	赤衣頭布	早稲田大学附属図書館本	敷物	林和泉掾版本 早大本との相違点
聖徳太子	右向 立姿 両手で布を持つ		袈裟	
僧正菩提	袈裟 袖手		僧網領	
大僧正行基	右向 袈裟 袖手		僧網領 横被	
伝教大師	頭布 禪定印		椅子	
弘法大師	右手に五鈷杵 左手に数珠		右向 右肩の袈裟(通肩)	
慈覚大師	袈裟 禪定印			
智証大師	袈裟 禪定印		右向 頭布 左膝立	
沙弥満誓	僧網領 袈裟 右手に扇子		僧網領ナシ 左手に扇子	
玄奘僧都	僧網領 袈裟 両手に数珠		右手に数珠	
僧正遍照	僧網領 袈裟 右手に扇子		右手に扇子	
喜撰法師	僧網領 袈裟 左手に数珠 左膝立		僧網領ナシ 数珠ナシ 右膝立	
僧正聖宝	右手に数珠 左手に袖		僧網領	
素性法師	僧網領 袈裟		右向	
空也上人	袈裟 両手で杖		右手に数珠 左手に杖(先端に鹿の角)	
日藏上人	袈裟 袖手		右向 僧網領 禪定印	
蟬丸	袈裟 右手に杖で頬杖		琵琶	
性空上人	袈裟 袖手		僧網領 左膝を立て手を組む	
小僧都源信	袈裟 両手で数珠		右手に数珠	

恵慶法師	袈裟	右向 僧網領 脇息
能因法師	袈裟 両手で数珠	後ろ向き 数珠ナシ
良暹法師	僧網領 袈裟 右手に数珠 頰杖	右向 右手に数珠ナシ
法師永観	袈裟 両手で数珠	僧網領 後ろ向き 数珠ナシ
登蓮法師	袈裟 右膝立	右向 僧網領 袖手 膝立てず
大僧正行尊	僧網領 袈裟 両手に数珠	右手に数珠
僧正永縁	僧網領 袈裟	右向 僧網領 袈裟 右手
俊恵法師	僧網領 袈裟	僧網領 袈裟
道因法師	袈裟 右手に扇子	右後向 僧網領 扇子
西行法師	左手に数珠	僧網領 袈裟 数珠ナシ 脇息
僧正慈円	僧網領 袈裟	右向 横被 右膝立て
二品法親王守覚	僧網領 袈裟	上置
法橋頭照	僧網領 袈裟 両手で扇子	右向 僧網領ナシ 左手に扇子 右膝立
寂蓮法師	僧網領 袈裟	
寂然法師	僧網領 袈裟	右向 右手に数珠
僧正行意	僧網領 袈裟 両手に数珠	右手に数珠
貞慶上人	僧網領 袈裟	和歌・歌仙絵ナシ
明恵上人	袈裟 両手で数珠	右向

※歌仙名の表記は林和泉掾版による

(ほんだ・じゅんこ 本学博士後期課程)